

# 米国日本語教育事情調査 —REX 派遣先校と日本語補習授業校を視察して—

藤森 弘子

(2003.10.31 受)

【キーワード】 REX プログラム、補習授業校、継承日本語、イマージョン教育

## 1. 訪問の目的と意義

現在、REX プログラム<sup>1</sup>派遣中の12期及び13期教員の教育事情を月例報告書による報告だけでなく、実際にどのように日本語授業を行い、外国教育施設という環境の下、他の同僚や職員と交流し、海外生活に適応しているか、こちらからの更なる支援が必要かどうか、などについて視察し、本人及び学校関係者等と懇談し、教員への支援及び今後の REX プログラムの運営改善に役立てることを目的とする。

次に、シアトル日本語補習授業校を訪問し、さまざまな観点から「外国教育施設」と「在外教育施設<sup>2</sup>」の相違をみることも目的とする。また、在シアトル総領事館および在オレゴン総領事館などへも表敬訪問し、海外との交流事業への支援や海外にいる日本人への支援をどのように行っているかについても情報を得る。

## 2. 訪問者及び日程

訪問者及び日程は以下のとおりである。

### (1) 事情調査担当：

文部科学省初等中等教育局国際教育課 中野宏栄氏  
東京外国語大学留学生日本語教育センター 藤森弘子

### (2) 訪問期間：2002年12月5日～2002年12月13日

---

1 外国教育施設日本語指導教員派遣事業 (Regional and Educational Exchanges for Mutual Understanding) のことで、海外の日本語教育機関の要請に応えるべく1990年より開始された文科省と総務省の共同プログラムである。日本の公立中・高教員を現職のまま2年間海外の初等・中等教育施設に日本語教師として派遣している。本センターでは3ヶ月間の REX 派遣前研修を行っている。

2 「日本人学校」「補習授業校」「私立在外教育施設」の3施設を指し、海外に在住する日本人児童生徒が通う学校のこと。最近では国際結婚した子弟や、現地の児童生徒数が増えている。

(3) 日程：

- 12月5日(木) 成田発 米国ワシントン州シアトル着  
在シアトル総領事館表敬訪問
- 12月6日(金)
  - 9:30 North Middle School 訪問 (REX13期岡本幸治教諭派遣先校)
  - 13:20~14:45 日本語授業見学 懇談及びヒアリング
  - 14:45~ コミュニティ・カレッジ訪問 懇談及びヒアリング
- 12月7日(土)
  - 10:00 シアトル補習校訪問
  - 10:30 幼少部借用校オールド校、借用施設等見学
  - 11:00~12:00 授業参観
  - 13:00~14:30 中高部借用校インターレイク校施設及び授業見学
  - 14:30~ 学校関係者と懇談及びヒアリング
- 12月8日(日)
  - 12:00 シアトル発 オレゴン州ポートランド着
- 12月9日(月)
  - 9:30 Beaverton High School 訪問 (REX12期岩瀬裕嗣教諭派遣先校)
  - 10:00 校長と懇談、日本語プログラムについての説明
  - 11:00 校内見学及び現地日本語担当教員らと懇談及びヒアリング
  - 13:00~14:30 日本語授業見学参加
  - 14:45~16:30 日本語スキットコンテスト
- 12月10日(火)
  - 9:30 在ポートランド総領事館表敬訪問
  - 11:00~11:30 Richmond Elementary School イマージョン日本語授業見学
  - 13:35 ポートランド発 フレズノ着
- 12月11日(水)
  - 9:00~9:30 Fort Miller Middle School 訪問 (REX12期岡本明美教諭派遣先校) 校長、岡本教諭と懇談及びヒアリング
  - 9:36~12:32 日本語授業見学
- 12月12日(木)
  - 9:00 フレズノ発 サンフランシスコ着 12:15 サンフランシスコ発
- 12月13日(金) 16:45 成田着

### 3. 訪問先機関における教育の現状

#### 3-1. North Middle School 訪問（ワシントン州エベレット市）

〈REX13期派遣教員：山口県・岡本幸治教諭派遣先校〉

##### 3-1-1. 学校及び教育の概要

シアトル市郊外に位置するエベレット市にある North Middle School は全校生徒数約750名である。シアトル市には、タコマ日本人町やシアトル日本人町跡があり、歴史的にも日本と縁が深い。近くに米国海軍基地があり、外国からの移民も多い。ちなみに、全校生徒のエスニシティは、Caucasian604名、Hispanic71名、Asian48名、African-American32名、American Indian/Alaskan Native24名（2002年度現在）となっている。

##### 3-1-2. 日本語授業の見学

この学校では、「日本語」科目は選択必修科目<sup>3</sup>として「芸術（Arts）」の中に位置づけられている。日本語を選択するかどうかは、本人の意思というよりカウンセラーの助言による場合が多い。9-11月期、12-2月期、3-6月期の三学期制となっている。

最初に見学した授業は、6年生15名の授業であった。今日が誕生日である相手にカードをあげるという設定場面をオーラルで導入していた。目標会話は「どうぞ（カードを渡しながら）」「ありがとう（カードをもらいながら）」「どういたしまして」の3発話である。口頭で導入した後、OHPでローマ字表記により、同発話を示した。この12月からはじまったクラスなので、生徒たちはほとんど初心者である。「どういたしまして」など、口が回らない生徒がいたので、単語レベルの発音練習を十分にした後で、ロールプレイ練習に移ったほうが定着度を高めるのではないかと感じた。

次にひらがなの導入をした。まず日本語の文字はいくつあるか生徒たちに考えさせ、言わせた後、ひらがなは70あると教え、カタカナも同数あると述べた。ひらがな文字の導入方法として、アソシエーション法を使って、あ行の文字と音を紹介した。

次のクラスは、7、8年生のクラスで18名だった。まず、先週からの続きで制作中の折り紙を行った。ドキドキ動くハートの折り紙である。岡本教諭の指示に従って、皆楽しそうに折っていた。現在使っている教室は美術の先生の部屋なの

---

3 他にコーラス、バンド、ドラマ、技術家庭、美術などがある。

で、生徒たちの絵画や折り紙の作品などが飾られていた。プレゼントをあげる人ともらう人がお礼をいう場面会話の練習では、「A：プレゼントです。どうぞ。」  
「B：ありがとう。(広告の切り抜きが入っている封筒を開けて)。ありがとう。」  
「A：どういたしまして。」というスキットを生徒に前に一人出させて、先生とロールプレイをした。やりたい生徒は多いのだが、反復練習が足りないためか、「どういたしまして」など発音が不明瞭な生徒が多かった。一語ずつ発音練習をきちんとしてから、スキットに入ったほうがよいであろう。我々見学者3名もスキットの相手役になり、クラスの生徒たちとロールプレイを楽しんだ。

授業終了後、岡本教諭を囲んで、懇談及びヒアリングを行った。授業の際、生徒全体を見渡すのがまず、大切であること、1対1で対応する場面が多かったのもっと生徒全員の注意を向けさせるように工夫したほうがよいというアドバイスをした。1対1で生徒に対応していると、他の生徒はその間つまらないので私語が多くなったり、持ってきた風船などで遊び出してしまうからである。

岡本教諭は、授業シラバスを立てる際に、事前研修で得た知識・経験がなければどうしたらよいかわからなかったであろうという感想を述べた。

### 3-2. Everett Community College 訪問

その後、同じエベレット市にあるコミュニティー・カレッジを訪問した。そこには、Nippon Business Institute (NBI) と Japanese Cultural and Resource Center がある。そこでは日本語のプログラムや日本経済、日本文化の授業などが開講されており、日本から米国への社会人文化交流ツアーや学生たちの日本ツアーなどの交流事業が行われている。エベレット市は山口県岩国市と姉妹都市提携を結んでおり、“Japanese Garden Project 2002/2003” がちょうど進行中であり、カレッジ敷地内には立派な日本庭園と日本式建築の家もすでに建設されている。

茶道のデモンストレーションなども催されるそうで、ビデオライブラリーや図書、パソコンなども設置されていて、日本のさまざまな情報がそこで調べられるように整備されている。

以上述べたように、エベレット市は日本人・日本語と関係が深い都市である。それを支援するべく、シアトル総領事館のほうでもさまざまなネットワーク作りの活動を実施していることを、懇談をとおして知ることができた。

### 3-3. シアトル日本語補習学校訪問

在外教育施設のうち、週日は現地校に通う日本人子弟のための教育援助を目的として、毎週土曜日に日本の教育指導要領に基づいた授業を提供する学校を「補習授業校 (Saturday School)」と呼ぶ。小・中学レベルが基本であるが、今回訪問したシアトル補習校のように、幼稚部から高等部まで開講しているところもある。現在の当シアトル補習授業校における児童生徒数は、小学部243人、中学部79人、幼稚部31人、高等部32人である。教員は、校長と教頭は日本からの派遣であるが、他はすべて現地採用である。パートタイムではあるが、皆熱心に教育をしていた。教員による自主的な勉強会もあるようだ。日本の本が置かれている図書室や体育道具などもある。

最初に訪問した幼・小部借用校オードル校 (Odle Middle School) は閑静な自然に恵まれた場所にあり、規模もかなり大きなところであった。授業料値上げも考えねばならないほど、年々資金的な面で大変になってきているようだ。そこで幼稚部から小学部までの授業を見せていただいた。小学校以上では日本の教科書を使用しているが、社会科などはシアトルの地理や生活事情なども取り入れて、「現地理解教育」として授業を行っている。子どもたちは非常に学習態度もよく、休みの一日を勉強に費やすのは大変だろうと想像するが、それ以上に彼らの知的欲求を満たすものがあるのかもしれない。現地校では、どうしても日本語や日本に関する知識が欠乏するので、このような機関を政府が保証援助していることは、重要なことといえる。最近是在外日本人が一時的な海外勤務で、数年で日本に帰国するタイプのものから、相当長く海外に留まる人、国際結婚し、日本の文化を継承させたい親の子弟<sup>4</sup>など、生徒の属性が非常に多様化してきているようである。したがって、補習校で必要とされる日本語及び日本語を使って授業する内容やレベルに差が出てきている。その打開策として、クラス運営を効率的に進めるために、各学年に2レベルのクラスを設定し、日本語運用能力が高いクラスと、長く当該国にいるため日本語力があまり高くない児童生徒のためのクラスとに分けて<sup>5</sup>、授業の進度が異なるようにしている。

次に中・高部の借用校 Interlake High School を訪問した。図書室は車を改造して作ったもので、日本の学校図書がたくさん置かれていて、子どもたちへ少し

---

4 「継承日本語」と呼んでいる。

5 プレイメントテストによって、しゃくなげクラスとさくらクラスに分けている。

でもいい教育や環境を供したいという思いが伝わってくる施設であった。

高等部になると、ぐっと生徒の数が減ってくる。それまでに帰国するものが多いからだそうだ。このような高校レベルの授業をとっている生徒たちに対して、将来の進路を米国の高等教育機関に進むのか、帰国子女枠で日本の高等教育機関に進むのか、などの実態調査を世界的規模で行うとよいのではないかと考える。海外における高校レベルの教育支援については、義務教育ではないという観点から、日本の高等教育へつながる重要な時期であるにもかかわらず、支援の手が手薄になっているのではないだろうか。

お昼ご飯は保護者の方の作ったお弁当を持参していた。おにぎりや色とりどりのお弁当が目立ち、この時間が楽しそうであった。保護者の方々は当番制でこのような昼食時の会場の整備や管理まで行っている。

全体的な感想としては、補習校に来る生徒は週日は現地校での勉強が、母語ではない言語で行われるということで苦勞しているであろうし、その上に週末に6時間も日本語で日本の指導要領に則った教育内容をわずかな時間で進んでいくので、相当に大変な努力をしているのだらうと感心させられた。保護者の方の努力も相当なものだと感じた。

### 3-4. Beaverton High School 訪問 (オレゴン州ビーバートン市)

〈REX12期派遣教員：富山県・岩瀬裕嗣教諭派遣先校〉

#### 3-4-1. 学校及び教育の概要

オレゴン州ポートランドには日本総領事館がある。FUJITSU、NEC、EPSONなどの日本企業も進出しており、日本との貿易関係も深い。Beaverton Central 駅で岩瀬教員の出迎えのもと、ビーバートン高校へ向かった。ビーバートン市はオレゴン州都ポートランド市のアメリカの古きよき時代を連想させる煉瓦作りの建物の雰囲気とは違ったカントリーという感じの町であった。午前10時に校長との懇談をした。岩瀬教諭とホストティーチャーであるノビンジャー先生が同席した。この地区は小学校5年、中学校3年、高校4年の5-3-4制である。したがって、この高校には9年生から12年生までが在籍している。校長が現在の問題として挙げていたのは、教育予算の削減問題である。年々厳しくなっているとのことである。実際、岩瀬教諭の話によると、REX 教員が来た分、ノビンジャー先生の教える時間数は少し軽減されるわけであるが、その分彼の給与は減額されることになってしまったそうで、予算削減の実情はREX プログラムにも影

響を及ぼすもので、厳しいと感じた。

今回の訪問をとおして、日本と異なったシステムがいくつかあることに気がついた。一つ目は、「カウンセラー」の存在である。日本の学校にもいるが、それとは違って、各学年の科目履修について、生徒たちにアドバイスをするかまたは、カウンセラーが主体的になって、各生徒の履修科目決定を下すような役割を負っている。二つ目は、高学年になると、シニアの生徒が先生の授業に入って、教師の助手的な仕事をしたりして、活躍していることである。その生徒の自信にもつながるし、先生も仕事を手伝ってもらえるという利点がある。後輩生徒にとっても、自分も頑張れば、先輩のようになれるというモデルを目の当たりにみることができ、いいシステムではないかと思う。ノビンジャー先生の部屋には、ケンジという honored を受けた 4 年生のアシスタントがいて、何かと世話をしてくれていた。一般に、米国では各教室が各教員個人の教室になっている場合が多く、時間ごとに生徒が移動するようになっている。

学校要覧<sup>6</sup>には、学校の方針や学年ごとのシラバスや成績状況、カリキュラムなどについて、詳しく記載されている。アカウントビリティという点では日本の学校も参考にすべきであろう。ビーバートンの高校の特徴として“WORLD LANGUAGES”というコースがあり、第一学年目にフランス語、ドイツ語、日本語、スペイン語のいずれかを選択できる。大学への進学のための単位としてとる場合は少なくとも 2 年は同じ外国語を通して履修しなければならない。その上のコースとして、“IB course”<sup>7</sup>というのがある、4 年目にそのコースをとることができる。

履修要覧によると、日本語コースの一年目のコースでは、まず、基本的なコミュニケーションスキルをつけるために、生徒はロールプレイや、テープやビデオ学習をもとに、個人またはグループ活動をとおして、4 技能を身につけることを目標として書いてある。そして、CIM と PASS アセスメントテストを受け、認定されなければならない。ノビンジャー先生のクラスでは「げんき I」と「げんき II」(1999 坂野他 ジャパンタイムズ出版) という初級用教科書を使用しており、4 年間で両冊を終えることになっている。

欧米の大学では IB 試験が大学入学試験に認定されているところも多いので、

---

6 Beaverton High School “Program Planning Guide 2002-2003” より

7 IB とは「International Baccalaureate」(国際バカロレア) の略で、大学受験資格試験として、国際的に通用する試験である。

日本でも今後これに関する調査等が必要であろう。

### 3-4-2. 岩瀬教諭の広範囲な活躍について

岩瀬教諭は派遣元である富山県とオレゴンとの国際交流を本格的に推進するために活動を広げている。特にインターネットを利用して、「ビーバーちゃんどんとこい」というウェブサイトを立ち上げ、生徒間の交流のみならず公開しているため、それ以外の人々からもアクセスがあるそうだ。他の人たちからの交流の記録も見せてくれた。また、社会科教員で社会福祉が専門であるため、その専門を生かして、当高校の養護学級の生徒と富山の養護学級の生徒との交流も始めたそうである。訪問時に、養護学級の授業の様子も見学させていただいた。

岩瀬教諭は活動を主とした授業を行っている。当日、日本語学習4年目の生徒2人が我々の案内役となり、学校内の施設案内をしてくれた。その際、日本語で紹介してくれた。彼らにとって、我々のような日本語母語話者と直接、会話をし、しかもその内容が自分たちの良く知っている学校についてであるから、この経験は日本語使用の自信につながる。このような取り組みは社会科教員の総合学習的な教育実践としてまた、日本語教育の観点からも現実のインターアクション教育として高く評価できる。REX 事前研修時から、生徒を教室外に出して活動させるという方法を駆使し、他の教員にもいい影響を与えてくれていた。このように語学の教員だけでなく、社会科などその他の教科教員の採用も積極的にしていくことが、現地の日本語教育の広がりだけでなく、日本と海外の派遣先の子どもたちとを結ぶ国内の国際理解教育の多様化にも貢献していくのではないだろうか。

### 3-4-3. REX プログラム等に関わる要望

岩瀬教諭から以下のような内容について要望が出された。

- (1) 日本語能力試験の受験地を拡大してほしい。米国ではロスアンジェルスがもっとも近い受験地であるが、高校生には遠い。3級や4級受験についてはポートランドとシアトルでも受けられるよう、受験地として認定してほしい。
  - (2) REX の広報活動の拡大：日本語と英語で REX の活動を紹介するウェブサイトを作ってほしい。
  - (3) 住居費の支給を希望する。
  - (4) 家族同伴者がいる場合も、それを公的な派遣として認可してほしい。
  - (5) 高校レベルでの交換留学においても、単位互換を制度化してほしい。日本に一年高校留学しても単位にならないという現状があるため。
- (3)については、現地が住居費を支給するのが基本になっている。ただし、こ



れは地方自治体同士の契約になっているので、事前に十分な協議が必要であろう。(4)については、REX 教員は派遣法という法律にしたがって、派遣されているので、現在のところ、家族分の手当ては出ないそうである。(5)については、より多くの事例を集めて、調査し、今後提言していく必要があるだろう。

#### 3-4-4. 日本語授業の見学

午後1時より2時半まで、ノビンジャー先生による高校2年生の日本語クラスを参観した。「げんきⅠ」は1、2年生で、「げんきⅡ」は3、4年生で主要教科書として勉強することになっている。ポートランド総領事館の城福氏と中野係長と私の3人でいったので、3つのグループに分かれ、日本人ゲストとして、「いつ日本に来ましたか」「どんな映画が好きですか」「どんな食べ物が好きですか」など、個人情報聞き出すタスクを行った。ノビンジャー先生は授業中、ほとんど媒介語を使わず日本語で授業を進めていた。

次に、放課後日本語部の活動として、特別に「BHS Japanese Skit Contest」を開催して下さった。我々が審査員となって、賞を決めることとなった。課題としては、1年生と2年生に対する課題は教科書「げんき」のなかのどの課でもよいので、スキットを選んで、暗記して発表するというものである。3年生に対する課題は5つのトピック：1. 日本の食べ物、2. 日本の映画、3. オレゴンのおもしろい所、4. BHSの先生、5. アメリカの食べ物、のなかから一つ選んでオリジナルのスキットを作り、発表するというものである。IBクラスの生徒に対する課題は上記の5つのトピックの中から一つ選んで即興でスキットを行うというものである。特にIBクラスの生徒たちは、非常に自然なイントネーションと口語的な表現を用いて発表していた。いずれも制限時間は2分から4分である。最後にコメントとともに賞品（岩瀬先生が用意したお菓子など）を授与した。生徒たちは皆熱心で、日本語の勉強を楽しんでいた。そこに、神奈川県の高校から1年間の留学プログラムで来ている日本人生徒も参観に来ていた。皆と接するのが楽しいようであった。教室にはアニメの本やポスターなどが貼られていた。岩瀬教諭は日本語部の部活動を活性化するためのさまざまな活動を精力的に実践していた。まず、月刊ニュースレターの発行や「千と千尋の神隠し」などの日本の映画鑑賞、日本人生徒とのインターネットを利用した意見交換などを支援し、積極的に進めていた。日本語部のニュースレターの内容はトピックが毎回変わっていて、非常に質が高く、読み応えがある。その実力を示す例として、総領事館主催の日本語スピーチコンテストにも6名の生徒が出場したことが挙げ

られる。1名が1位に、もう1名は4位となり、2人も入賞したそうである。オレゴン州はイマージョン教育を行っている学校が複数あるので、全体的に日本語のレベルが高いそうである。また、IBの試験はかなりレベルが高いので、通常の授業だけでは合格は難しいとのこと、放課後も日本語担当教員が補習をしているそうだ。

### 3-4-5. Richmond Elementary School 訪問（オレゴン州）

12月10日午前中にオレゴン州ポートランド総領事館に表敬訪問した際、総領事の取り計らいで、日本語のイマージョン教育を実践している学校を訪問することができた。ポートランド市内にある公立小学校の一つ、「リッチモンド小学校（Richmond Elementary School）」の授業を参観することができた。全米で一番最初に日本語イマージョンを始めたところだそうだ。「Japanese Magnet Program (JMP)」とよばれる小中一貫の日本語イマージョンプログラムがある。日本人ネイティブの教師が授業をしていた。すべて日本語で授業が行われているが、動詞を言うときだけは「帰る支度をします/します。食べる/食べます。……」というように辞書形とます形を必ず続けて話していた。少し不自然な感じはするが、ここでの定着に貢献している練習方法なのかもしれない。小学校らしく、教室の壁や、廊下側の壁にも生徒の作品がたくさん貼られていた。地元の親からのここへの入学希望者が多いそうである。

このようなイマージョン教育の効果について、保護者に対する冊子の中に“Why study Japanese?”として、第二言語を学ぶ利点について、以下のような項目が書かれていた<sup>8</sup>。

- 日本語の音韻体系及び文字システムは、英語のように複雑ではないので1年生でも勉強しやすい。日本語を読む作業は英語のよりも易しい。
- 漢字のような象形文字を学ぶと右脳を活性化して視覚による記憶力が增强される。
- 日本は何千年もの歴史と芸術を有していて、文化的に豊かである。
- 日本語の勉強は、他のアジアの言語や文化を知る最初的手段となる。
- ポートランド市と北海道札幌市とは最も古い姉妹都市である。
- 2001年現在で、オレゴン州は6,222名の日本人を受け入れている。その上3,307

---

<sup>8</sup> 今回訪問時にいただいたリーフレット Richmond Elementary School の中に記載されていた内容を翻訳したものである。

人の長期滞在者がいる。

- オレゴンでは太平洋地域との貿易が重要である。その中でも日本は最大の経済力を持っている。1億6千万ドルの対外貿易額で農産物を日本へ輸出している。125の日本商社がここにあり、14,000人が雇用されている。
- 富山県はオレゴン州と姉妹県であり、強い協力関係にある。

### 3-5. Fort Miller Middle School 訪問 (カリフォルニア州フレズノ郡)

〈REX12期派遣教員：高知県・岡本明美教諭派遣先校〉

12月10日の午後ポートランド空港からフレズノへバスのような小型飛行機で移動した。岡本明美教諭が空港まで出迎えに来てくれた。フレズノは人口も少なく、大きな産業があるわけではない。貧困家庭も多く、盗難や薬物犯罪なども多いらしい。彼女がこちらに赴任して驚いたのは、教師が生徒を信頼していないことだという。“Trust No Students”と言われたそうだ。校内で何か問題が起きるとすぐ警察を呼ぶ。教師はただ観察したことを報告するだけである。

校長と懇談した際、全校生徒の親のうち、80%が貧困のため、政府からの援助を受けていることを聞いた。また全生徒のうち15%は何らかの学習障害を持っているという。盗み、ドラッグ、detention、途中で生徒が学校から消えてしまうといったことは日常である。そして、今学期の大きな問題は、岡本教員の日本語クラスの固定の教室がないことである。教室がないので、教材を入れた大きなボックスをカートでひいて移動している。黒板も自由に使えないので、小さな白板とペンを生徒数分自分で用意してきて、授業中文字の練習をさせている。今年度になって、急に生徒数が増えて教室の数が足りなくなったからだそうだ。校長からは、“traveling teacher”で申し訳ないという詫げる言葉があった。

9：36～10：59の授業と11：09～12：32の授業を見せていただいた。最初のクラスはおとなしくて真面目な生徒たちばかりであった。ひらがなやカタカナ指導、世界地図を使って、国名と「上、下、左、右、真ん中」などの位置詞の導入と練習、クリスマスシーズンだったので、折り紙でクリスマスカードを作るという課題もさせていた。次のクラスでも同じ内容を行ったが、岡本教諭の指摘するとおり、いたずら好きの生徒が多いクラスであった。しかし、彼らをうまくとりなして、集中させ、飽きさせないように指導していた。ここの生徒には90分近い授業時間は長すぎる。集中力が持続できないのがみてとれる。男子生徒の一人が「遊戯王」のカードを集めていてそれらを自慢げに見せてくれた。そのキャラクター

のカタカナ名を一生懸命覚えようとしていた。そのような動機付けも統合的動機付け<sup>9</sup>の一つとして、考えられる。初等中等教育で日本語を学ぶ学習者には日本の文化、なかでもポップカルチャー、サブカルチャーと呼ばれるアニメや漫画といった大衆文化に人気があり、それらを深く知りたいまたは親しみを感ずるがゆえに日本語を履修しているものが少なくない。

高知とフレズノとの交流及びその意義等については、校長は周知していないようであった。それで、詳しい事情を知っているフレズノ郡教育省の Jeanette Phillips 氏と電話で連絡をとってくれた。氏との話の中で、カリフォルニア州の教育予算削減により、学校側が REX 教員を余裕を持って受け入れられていないということ、双方の連絡を密にとる係の人が両方にいないという点が自治体としての積極的な動きがないということに通じているのではないかという見解を述べた。岡本教諭も高知県にフレズノの問題について、強く改善を要請はしていないようであった。自治体同士がどのような意識で派遣をし、受け入れるのかといったあり方を、今後は考えていくべきである。

#### 4. まとめと今後の課題

今回の出張では、主に米国北西部地域 3 箇所の REX 派遣校とシアトル補習授業校への訪問と、ポートランド総領事館のご配慮による日本語イマージョン教育実践校とを見学することができた。2001年度の豪州 REX 出張での感想と同様、中等教育機関での日本語学習者数は以前に比べて、確実に増加している。しかし、学校によっては、教員に対する待遇や日本語教育に対する姿勢に大きな差があることがしばしば派遣の問題となりうる。各々の学校における生徒の日本語力にもかなり差がある。ビーバートン高校のようにナイキやインテルという大企業がある町は企業による税金などである程度潤っている、一般生活水準も高い地域では、教育程度も全体に高いように感じられた。そのような環境では、大学に進学できるだけの日本語能力の向上を図ることができるし、親からも求められる。生徒たちも日本語学習が楽しくてたまらない様子であった。親の支援も得やすい。

しかし一方で、学校の環境として、貧困家庭が多かったり、社会的な問題を抱

---

9 Gardner & Lambert (1972) の研究では、学習動機として「統合的動機付け」と「道具的動機付け」があり、前者は第二言語の文化自体に興味を持つこと、後者はよりよい仕事を得るための手段として考える動機であり、カナダで行われた初期の研究結果では「統合的動機付け」の学習者のほうが学習の達成度に強く関与しているということが示された。〔外国語教育学大辞典〕1999より）

えている地域では、日本語教育以前に学習できる態勢にあるかどうか大きな問題になる。そのようなところでは REX 教員の指導も大変であろうと推察される。そして、そのような解決課題が生じたときに、それを打開するために交渉したり、次期の REX 教員には困らないようなパイプを作ってくるなど、実行に移すのは大変なことである。外国教育施設で起こりうるさまざまな問題に対処するというのは、相当な交渉能力及び行動力が必要とされる。今後は選考の際に、このような能力も評価の対象の一つにしてもよいのではないだろうか。REX 事前研修においても、課題解決の重要性を顕示できるような事例研究課題を研修内容に組み込むことも考えられる。

一方で、派遣中の REX 教員の精神面のケアも重要である。そこで、当該派遣地で思わぬ出来事や難題に直面し、悩みを抱えてどうしてよいかわからない教員の心理を少しでも和らげるために、今年度から当センターのカウンセラーによる「e-mail 相談室」を開設することにした。

今回はシアトル日本語補習授業校も土曜日に視察することができ、さまざまな観点から「外国教育施設」と「在外教育施設」の相違点や共通点をみることができた。現状として、外国教育施設では、中等教育レベルでの日本語学習者数がどんどん増加しているが、日本語教師数はまだその数に対応できていないという問題点が挙げられる。他の REX 教員の月例報告書をもても、一日に 4 校かけもちで日本語クラスをまわったり、日本語クラスが財政上の問題で閉講になるかもしれないという学校で教えている REX 教員に、生徒の父母たちからこの日本語プログラムをずっと続けてほしいという要請があったり、という事例が多く報告されている。一方、在外教育施設の最近の傾向として、いわゆる国語教育や他の教科教育を行ううでの日本語力に問題がある子弟の入学希望者が増えていることが挙げられる。これは、「継承語としての日本語教育」をどう考えていくか、という問題にいきつくのではないか。日本人子弟であっても、日本語力が皆堪能というわけにはいなくなっている。今回の出張で、「国語としての日本語教育 (JNL)」「外国語としての日本語教育 (JFL)」「第二言語としての日本語教育 (JSL)」「継承語としての日本語教育 (JHL)」など日本語教育が多様な方面に広がっていることを実感した。

また、シアトル及びオレゴンの総領事館に表敬訪問した際に、双方とも、領事館の方々が海外でのこのような教育交流活動を積極的に支援、助言をしていく姿勢で対処されていることを知り、心強く感じた。特にシアトル総領事館の文化広

報担当官の方は、日本語日本文化を発信することに積極的で、当該地域での REX 教員のネットワークの輪を広げてくださるような情報機会を提供してくれた。このように、外務省と文部科学省との連携を強化していけば、より幅広い国際交流が行われるものと確信する。

中等教育レベルの日本語学習者の増大傾向を好機ととらえ、日本の高等教育および中等教育レベルの国際交流プログラムの拡充および質の充実がなされることを望むしだいである。

### 参考文献

赤尾勝己他編著（2000）『教育データブック2000-2001』時事通信社

臼井博（2001）『アメリカの学校文化日本の学校文化 学びのコミュニティの創造』金子書房

柏崎雅世（2002）「英仏中等教育機関における REX プログラムに関わる日本語教育事情の現状と課題」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第28号 東京外国語大学留学生日本語教育センター 171-190

国際交流基金 日本語国際センター編『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・1998年－』

K. ジョンソン・H・ジョンソン編（1999）『外国語教育学大辞典』大修館書店

中島和子（2001）『バイリンガル教育の方法』アルク

————他（2003）「もう一つの年少者日本語教育－継承語教育の問題」『2003年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 241-252

二宮皓他（1995）『世界の学校－比較教育文化論の視点にたって－』福村出版

藤森弘子（2002）「REX プログラム拡大の可能性－開発支援型から交流支援型へ－」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第28号東京外国語大学留学生日本語教育センター 191-204

————（2003）「オーストラリア日本語教育事情調査－REX 派遣先校と日本人学校を視察して－」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第29号東京外国語大学留学生日本語教育センター 183-197

————（2003）「外国・在外教育施設における日本語教育の現状と需要調査研究」『米国北東部日本語教師会継承語教育大会』発表資料

**The Current State of Japanese Language Teaching in the U. S. A.  
— Report on Visits to a Saturday Japanese School for Japanese Students  
and Japanese Classes at Secondary Schools in the U. S. A. —**

**FUJIMORI, Hiroko**

The REX (Regional and Educational Exchanges for Mutual Understanding) Program was started in 1990 by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology in conjunction with the Ministry of Home Affairs and Prefectural Governments.

Since then, 283 teachers from Japanese lower and upper secondary public schools have been sent abroad to teach Japanese language and culture. The Japanese Language Center, Tokyo University of Foreign Studies has been in charge of the pre-departure training program for REX teachers.

From December 5th to December 13th in 2002, a staff member from the Ministry of Education and I visited some secondary schools on the West Coast, the U. S. A., where the REX teachers had been sent. We also visited a Saturday School for Japanese students in Seattle, and an elementary school to observe the partial immersion program in Japanese for American pupils in Oregon.

We found diverse types of Japanese language education, e. g. Japanese as a foreign language, Japanese as the second language, Japanese as a heritage language, bilingual education (in the form of “immersion” program) in those different institutions.